

Developers Summit 2016 参加報告

福井清悟、伊藤康広
工学系技術支援室 情報通信技術系

はじめに

Developers Summit は翔泳社主催の総合 IT コンファレンスで、普段開発現場で働いている技術者たちが実際の開発事例などに基づいて最新の技術やトレンドとなっている技術について発表・報告する場である。本報告書では Developers Summit 2016 の概要と内容を説明し、参加した感想を最後にまとめる。

1. 開催概要

今回参加した Developers Summit 2016 は、東京・目黒雅叙園を会場として 2 月 18 日(木)・19 日(金)の 2 日間に渡って開催された。基本的に 1 つのセッションは 45 分で、5 つの部屋で並行して行われた。参加者は事前申し込み時に各自で参加したいセッションに登録し、当日それらに参加するという方式であった。公式ホームページによると総参加者数 2000 ~ 2500 名という規模の大きさであり、聴講したセッションに関してはどれもほぼ満席になっていたように感じた。また、開催回ごとにテーマが決まっており、今回のテーマは「Hack the Real - ソフトウェアエンジニアの『知』で、『もの・現場・世界』をハックしよう」というものであった。実際このテーマに沿ったセッションは数多くあり、具体的には Web アプリ開発、モバイルアプリ開発、データ分析などの開発事例を取り上げていたが、「高度な技術を用いたソフトウェア開発により現実世界をよりよくする」という内容で共通していたように思われる。

2. 内容

多くのセッションがソフトウェア開発に関連するものであり、聴講したセッションでは「データ分析」、「機械学習」、「分散処理」、「クラウド」といったキーワードをよく耳にした。これらは数年前から発展している分野であり最新の技術というわけではないが、多くのセッションで取り上げられていたことから最近でもトレンドになっているということを改めて実感した。

我々の主な業務にサーバの構築・運用があるが、これらの業務に直結できてすぐに利用できるような内容のセッションは無かった。業務の一部に応用できそうな内容のセッションはあったが、実際にそれらの技術や開発手法を業務に取り入れることを考えた場合、技術研鑽やツールの使い方の習得等に時間をかける必要があり、すぐに新しいシステムを構築して利用するというのは難しいという印象を受けた。また、業務に関係なく個人的に興味を持った技術もあったが、やりたいと思ったことを全てやれるわけではないので、時間や労力をかけてまで取り入れるべきかどうかの判断も必要になると感じた。

技術面に関するセッションだけでなく、「よいエンジニアになるための習慣」や「よい開発組織に必要な要素とは」といった、個人の成長や組織のマネジメントに必要なことを話すセッションもあり、技術者として経験の浅い自分にとっては非常に参考になる話であった。

3. まとめ

各セッション 45 分という短い時間の中で取り上げている技術についての原理を学ぶといったことはできなかったが、その技術がどのような状況・課題に対してどのように使えるかといった大まかな概要については知ることができた。できるだけ自分の業務と関係のありそうなセッションを選び、業務に使えるかということを念頭に置いて聴講したが、即座に業務に直結させるのは難しそうなものが多かった。しかし、将来的にそれらの技術を使う、または別の技術との比較が必要になる可能性があると考えれば、最近のトレンド技術を幅広く知れたことは有益であったと言える。また、各セッションは開発の現場で働く技術者たちが実際に行った事例に基づいて発表していたので、内容が具体的で非常に分かりやすかった。具体例に基づいた発表やデモを実演しながらの発表は、分かりやすい発表方法として参考になった。

今回の **Developers Summit 2016** に参加したことで幅広いトレンド技術とエンジニアとして成長するための習慣を知ることができた。特に個人で取り組める習慣はすぐに普段の生活の中に取り入れることができるので、それらを実践してエンジニアとして成長していきたいと思う。